
あまりのことばたち

coach

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あまりのことばたち

【Nコード】

N6184L

【作者名】

coach

【あらすじ】

心からあふれたひとしずく。それが、言葉という豊かな大地をうがち小さな海を作る。それはとても小さなものだけれど立派な海だ。母なるものだ。その母から生まれたもの。それを詩と呼ぶことができるなら、それはそれ。もし呼ぶことができなければ、ただ心におさめられなかった「あまりのことばたち」とそう呼んでくれれば結構だ。

想いを空に

心の器に想いがたまり
器から想いがあふれるとき
時にそれは叫びとなり
時にそれは叫びにもならず
時にそれは言葉となる

言葉になったそれは誰に向けようとしたものでもなく
強いて言えば空に向けられたものだ
ぼくは空から生まれた

ぼくの言葉は空に反射し
あまねく世界に拡散する
ぼくのこの想いを
ぼくではない誰かが聞くこともあるのだろうか

それともそれは
風のそよぎ
水のせせらぎ
地のふるえ
光のきらめき
そんなものとして解釈されて
誰にも聞かれずにその響きは消えていくのだろうか

いつか誰かの言葉をぼくが聞くことはあるのだろうか

何もあげない

妬^{ねた}みも

怒りも

悲しみも

憎しみも

この身に宿るあらゆる気持ちは

誰のものでもないこのわたしのもの

孤独も

絶望も

恐怖も

嫌悪も

この身をひたすあらゆる感覚は

誰のものでもなくこのわたしのもの

誰にもあげない

何一つ分けてあげない

そんなものを持っていて何になるのって

首をかしげてみな言うけれど

わたしにしか分からない

わたしのものの価値

だからわたしを理解しようとしないでね

分かったと思ったそれは

きつと誤解だから

何もあげない

全部わたしのもの

問いはまた新た

答えが欲しいと思って考え始めた問いに
答えられたと思ったのも束の間
答えはまた新たな問いの扉を開き
ぼくはまた新たな答えを探す

たった一つ確実なものを知りたくて
考え始めたはずだった
次から次に続く問いに向き合って
確実なものがないことを知る

分からないことが苦しくて
分かっててもなお苦しみは続く
いつそ投げ出したいと思ってても
自分を投げだすことはできない

問うこと自体に意味がある
そう思うようになったのはいつからだろう
たとえ答えが分からなくても
もしかしたら答えが無くて
問いから問いへ
問いからまた新たな問いへ
ぼくはそうして生きていく

星に向かって

部屋の中で遊んでいた
あたかな部屋の中
そこには全てがあつて
ぬいぐるみのうさぎも笑っていた

遊びに飽きたわたしは
振り返つて外を見た
窓の外には夢が広がっていて
わたしの背中に翼が生えた

どこにでも行けるんだって
わたしの中から声がする
どこにでも行けるんだよって
うさぎはどこか悲しそう

思いきり翼をはばたかせて
飛び上がったわたし
風は冷たいけれど心地よく
世界は遥か下にある

さあどこへ行こう
膨らんだ胸はすぐにしぼんだ
世界はとても広大で
わたしはともちっぽけだった

助けを求めたうさぎの
その姿はもう見えず

周りを見たわたしの目に
名も知らぬ小さな光

目指すべき場所が無いのなら
あの星に向かって飛べ
星がふらふら動くなら
わたしもふらふらさまよえばいい

もし行き着く場所が無かったら
気に入る場所が無かったら
でも大丈夫
またあの部屋に戻ればいい

道の途中

さよなら

さよなら

さよなら

振り返りもせず行くきみへ

ぼくは手を振ろう

きみは去り

ぼくはとどまる

それは少し

そう

ほんの少し寂しいことだけど

二人の道はここまでしか続いてなくて

ぼくときみはここで別れた

別れのときがくるってこと

ずっと前から分かっていた

いまきみはぼくと別れ

ぼくはきみの背を見ることしかできないけど
でも忘れない

二人離れ離れになって

二度ともう会えなくても

二人の間に無限の隔たりができて

二度と言葉が届かなくても

きみのことは忘れない

きみのことはぼくが覚えてる

まっすぐに

日の昇る方へ

まっすぐに歩いてきたつもりが
ふと後ろを振り向けば
足あととはくねくね

おかしいな

どこかで道を間違えた
わたしは地図を確認して
道のりをたどってみる

交差点では曲がらなかった
家の庭を通らせてもらった
水たまりだってジャンプして
ちよつと泥水はねたけど
構わずまっすぐ進んできた
まっすぐ
まっすぐに

くねくねしている足あとを
ちゃんとまっすぐ直したくなった
だってまっすぐ来たのだから
足あとだってまっすぐじゃなくちゃ

戻ろうとしたわたし
慌ててそこに立ち止まった
そこから戻ってしまつたら
くねくねどころの話じゃない

途方にくれて行く先を見ると
昇る日が前にある

昇る日はいつも前にあつて
まっすぐ歩いてくのはここらだつて構わない

わたしは地図を広げた

今度はまっすぐ行けるように

今度は間違えないように

でも間違えるも間違えないも

地図はまっしろ

もともと道なんかないことに気がついた

わたしは一步を踏み出した

その一步がまっすぐなものかどうか

もう気にしないことにした

その一步がわたしの一步なら

まっすぐなものに決まつてゐる

差し伸べる手は

助けを求めて取った手に
引きあげられ

濁流から助けられたぼくは

助けてくれた同じ手に
背を押され

崖から突き落とされた

助ける気なんかさらさら無かったんだって

気がついたぼくは

崖を登り始めた

一歩一歩

自分の力で

もう助けを求めるつもりはない

崖を登りきったぼくは

助けの声を聞いた

穴の中から響く悲痛な声

誰かが落ちているらしい

思わず差し伸べた手に

通う温かなぬくもり

穴から引きあげたあとも

ぼくはその手を取ったまま

助け上げたその手を握って

一緒に歩いていきたかったけど

崖をよじ上ったぼくの手はごつごつと固くなって

ぼくに引き上げられたその手はやわらかく繊細だった

ぼくは手を放した

もう一度穴に落とすことはしなかったけど

ここから先は別々に行こう

一緒には歩けない

ひとりで歩いていった先に

ぼくを引きあげて

ぼくを突き落とした手があった

ぼくはその手を取った

今度はぼくを拒絶することなく

その手もごつごつ固かった

ここではないどこかへ

ここではないどこかへ

ここではないどこかへ

ここではないどこかへ行けたなら

何を捨てたって惜しくない

お金も

命も

あなたへのこの想いでさえも

ここではないどこかへ行けるなら

幾百の山を越え

幾千の海を渡り

ゆたかな地へたどりつけたとしても

見上げる空は変わらない

それはあなたと見た空とおんなじだろう

ここではないどこかへ行けないとしたら

せめてこの気持ちを忘れない

ここにいないこと

あなたと出会ったこと

そういうことを奇跡と信じて

ただ穏やかに生きていたい

きみを花にたとえれば

きみを花にたとえれば
どんな花になるだろう

きみは

バラよりも華やかで
タンポポよりも清楚
ランよりも高貴で
チューリップより可憐だ

きみを花にたとえようとして
ぼくは花の名を知らないことを知る

もしもきみが花ならば
それはこんな花だろう

朝は食卓に置かれ家族の希望となつて
夜は窓辺に飾られ恋人達の安らぎとなる
愛の告白の時に競って手に入れられて
別れゆく友の孤独を癒す

きみを花にたとえられなくて
それはそれでいいのかも
きみはきみという花だ
他のどんな花にも似ていない

新しい名前

あなたへのこの想いに
新しい名前をつけよう
これはわたしだけの気持ち
世界に一つだけのもの

ありふれたものはだめ
詩に歌われたものもだめ
わたしの言葉で名付けたい
歴史に初めて現れた

新しい星を見つけた天文学者のようにわくわくと
みどりごを祝福する母のように神聖な気持ちで
考えだした名前は
言うことも書くこともできない

それはわたしの胸の中
決して誰にも伝えられず
これからわたしと共にあって
わたしと共に滅ぶでしょう

わたしへのあなたの気持ちを
あなたの言葉で名付けてほしい
それをあなたの胸に抱き
わたしと一緒に生きてほしい

思い出によせて

思い出していた

きみと初めて出会ったときのこと

それはずっとずっとむかし

ぼくたちがまだ光だったころ

湖水をきらめかせて

若葉を明るく染めて

夜をいつそう濃くして

ぼくたちは語りあつたね

きみと二度目にあつたとき

はじめ誰だか分からなかった

きみにはかたちがあつて

ぼくにもかたちがあつたから

かたちあるものの中に

かたちのないものを見た

きみの中にある光は

ぼくを思い出の奥へと導いてくれた

そのときの記憶に

そのときの想いに

ぼくはまたきみのことを好きになって

今またきみの前にいる

あなたを困らせるわけ

わたしのどこが好きなの
あなたを困らせる
わたしのお決まりの問い

すがたが好きとあなたが言う
目に見えるものなんてと
わたしは怒る

こころが好きとあなたが言う
見たことあるのって
わたしは怒る

わたしのことどのくらい好き
あなたを困らせる
わたしのわがまま

この世界と同じくらいとあなたが言う
表現できる程度だなんてと
わたしは怒る

言葉にできないとあなたが言う
そんな安っぽい言葉と
わたしは怒る

困りきつたあなたは
答えを尋ねようとせず
困らせたわたしは

不機嫌にそっぽを向く

ちらりとうかがった横目に
一生懸命考えるあなたの姿
そのままずっと考えていてね
ずっとずっとわたしのそばで

石ころころころ

ぼくは石ころ

今日もころころ

転がる草地の上で

きらきら光るやつを見た

玉と名乗ったそいつは

ぼくをまじまじと見て

驚いた顔でこう言った

傷つくのが怖くないの

気にしてたら転がれないよ

ぼくが言うと

玉は寂しそうな顔

傷ついたら自分が自分でなくなっちゃう

傷ついても自分は自分でしかないよ

ぼくはそばを通りすぎた

しばらくして振り向くと

日に反射してきらり

それは確かに美しくて

傷のないその光を

いつか誰かに見つけてもらって

ここではない場所へ行けるだろう

誰かを待つのも自分で転がるのも
同様に価値のあること

でもぼくは転がった方がいい
傷つくのなんかへっちゃら

大げさなことばで

大げさなことばで愛を語ろう

この気持ちが少しでも本当に見えるように

大げさなことばで夢を語ろう

この気持ちを少しでも強く持てるように

大げさなことばで生を語ろう

この気持ちに少しでも意味を見いだせるように

身の丈に合わない大きなことば

いつかそれが等身大にまですりきれて

あるいはわたしが大きくなって

力まずに

素直に

愉快的気持ちでこの身にまどえるように

しばらくのあいだ

声の続く限り大きな声で

考えつく限りの大げさなことばで

きみと夏祭りの夜

しじまを励ますお囃子はやしの音
闇を華やかに彩る提灯の下
浴衣がやけに可愛く見えるのは
きっと身につけたきみのせい

金魚をひやかして紅い飴あかなめ
うさぎを撃ちそこなつて甘酒をあおつた
はぐれないようになんて言い訳して
ぼくは半ばどさくさまぎれ

夜空を明るく染めた打ち上げ花火
でもそれはほんの一瞬のこと
ずっと続けばいいのになんて
男らしくないって思われたかな

人波を縫つてきみの手を引いて
ぼくはちよつと誇らしくなった
きみの手を握つていれば
どこまでも行けるような気がしたんだ

また来年もと言おうと思つて
来年だけじゃ嫌だと考え直したけれど
ずっと一緒になんて言えなくて
ただ今があることに感謝した

空と大地のあいだ

大地を母に持ったわたしは

翼を欲しながら着々と足を動かす

上の不確かさに憧れながら下の確かさだけを感じ

夢を見る振りをして醒めた意識のままでいる

終わりをなくせば始まりもなくなつて

死が無いと知ること生だけが残る

それが喜びであることは確かだけれど

悲しみがなければ本当の喜びもまた無い

空を父に持ったわたしは

地を歩きながらときに跳躍する

確実なものを知りながらそれを放り投げ

現実を直視する振りをしてひそかに夢を描く

始まりから終わりであることが決まっについて

生きながら同時に死につつある

それは何という悲しみだろう

喜びでもありうるからこそなお悲しい

大地と空のあいだに生まれたわたしは

正気と狂気をちょうど半分ずつ持つ

そのどちらがよりまっとうなものなのか

わたしは知らないし知るすべを持たない

きみの悲しみをぼくに

きみの悲しみをぼくがもらおうか

誰にも理解されない孤独を

誰にも必要とされない寂しさを

誰にも頼ることのできない苦しみを

そっくりぼくが受け止めてあげよう

きみは力いっぱい泣けばいい

声を振り絞って叫べばいい

涙が涸れ声が噎れたときに知るだろう

きみと同じ悲しみを持つ人がいることを

いてもなおきみの悲しみは減らないことを

きみの悲しみはきみのもので

誰もそれを代わりに悲しむことはできない

きみの人生を誰かが代わって生きることができないように

きみの悲しみはきみだけのもの

悲しみとともにあることが生きるということ

ただここに在ること

他人はわたしを尊敬し恐怖し無視した

わたしはわたしを肯定し否定し見て見ぬふりした

世界がこのようであつたことと

わたしがこのようであつたことは

一分の隙もなくかさなつた

それは祝うべきものでもなければ

また呪うべきものでもない

世界とわたしの一致を

まるで何か大事なことででもあるかのように

もつともらしい言葉で飾るのをわたしは好まない

好まないと片意地を張るそういう自分も好きじゃない

あつた あつた あつた

在るように在つた

あつた あつた あつた

在るようにしかなかった

ただそれだけのこと

ただそれだけのことなのに

それは時にこんなにも愛おしく

それは時にこんなにも憎らしい

負けの決まっている戦い

ある日ぼくの前に現れたそいつは
ぼくを一方的に打ちのめした
打ちのめした手を差し出すあたり
嫌なやつだとぼくは思った

その手を取れば再戦の始まり
取らなかったとしてもいずれ始まる
逃げ場のないぼくは覚悟を決めて
もちろん二度目も負けてしまった

そいつは何度もやってきて
何度もぼくを打ちのめす
敵でありながらその一方
父であり師であり友でもある

はじめから負けが決まっている戦いだ
なにせ勝ち方が決まっていない
どうすれば勝ちになるのか分からない
そもそもぼくに勝つ気がない

何度も差し出される手を取るうち
いつもまにか自力で起き上がれるようになって
それに気がついてしまったぼくは
いつそう勝ち負けがどうでもよくなった

振り子時計

とても楽しいことがあったあと
急に涙が出て

とても悲しいことがあったあと
急に笑いたくなる

わたしのこころは振り子のよう
あっちの果てまで振れるとこっちに戻り
こっちの果てまで振れるとあっちに帰る

振り子の上には時計がついていて
振り子が揺れるたびわたしは大人になる

いつかその振り子の幅がもっと小さくなって
もっと静かに生きていくことができるだろうか

それとも振り子の幅はずっと変わらずに
ある日唐突に振り子は動きを止めるのだろうか

美しい心

ぼくは心が欲しかった
それもただの心じゃない
透き通るような美しい心だ
普通の心は持ち合わせてる

それは世界を輝かせる
それは人生に意味を与える
それは古いぼくを洗い
それは未来を現在にする

随分ほうぼう探し回ったけど
それはどこにも見つからなかった
いろいろ探しているうちに
少しずつ心に汚れがついた

美しいものを探し求めて
必死になればなるほど
自分の醜さを知るようになって
そんな時出会ったのがきみだった

それは一輪の花のように
それは一編の詩のような
それは一筋の光のよう
で
ぼくの心は明るくなった

きみの心にぼくの心はさらされて
瞬間確かに美しくなったんだ

きみがぼくのもとを去ると
ぼくはふたたび元通り

でもその一瞬で十分だった

ぼくは美しい心を見た

美しいものはちゃんとそこにあって
ぼくはただそれだけでいいんだ

夏祭りの夜あなたと

虫の音に笛の音が応え

かえるの声と張り合う和太鼓の響き

魔法の浴衣を身にまとって

わたしはいつもの二割増し

屋台をはしごして綿菓子でしめ

ラムネを飲み干して手持ちぶさた

仕方がない振りで差し出した手を

こわれもののように取ってくれたあなた

闇夜に灯る光の花は

一瞬で散ってしまつて

あんな風だったらしいのになんて

女の子らしくないって思われたかな

人波を泳ぎながらあなたに手を取られ

わたしの胸はいつぱいだった

あなたに手を引いてもらえる自分であることが

わたしにはなによりも誇らしかった

この今がわたしの中に永遠にあるよつて

そんなことわざわざ言いたくなかった

言葉にしなければいけないものなんて

わたしたちの間には要らなかつたから

ある歌い手の嘆き

それはぼくのために歌っていた

ぼくのためだけの歌

ぼくの喜び ぼくの悲しみ ぼくの怒り

あらゆるぼくの感情を言葉にして

ぼくのなかからあらいざらい出してしまわなければ

生きていくのがむずかしかったんだ

歌うことは生きることだった

それはある日きみへと向けられた

ぼくときみのための歌

きみへの愛 きみへの感謝 ちょっとした恨みごと

きみがくれた新しい感情を詩にして

ぼくのなかから産み出していくことは

どんなにか素敵なことだったろう

歌うことは良く生きることになった

そのうちみんながぼくの歌を聞いてくれるようになった

みんなのための歌

みんなの共通の思い 共通の悩み

今までぼくが持ったことのない感情をリズムにのせて

精一杯歌うことは

歌えば歌うだけ苦しくなった

歌うことは生きることと切り離された

ぼくはもう歌うことができない

歌われたそれはみんなの共感を誘って

ぼくが何を歌ってもそれは無限に解釈されて

ついにはみんなの言葉に置き換えられてしまう
みんなが共感できないこと
誰の言葉にもならないこと
それこそがぼくの歌で
ぼくが歌う意味だった

おかあさんがきらい

わたしはおかあさんがきらい
だつてあれこれうるさいんだもの
あれをしなさい

これはだめ

あれはだめだけどこれはいいの
もういみがわかんない

きつとむかしおかあさんのおかあさん

おばあちゃんにいわれたことを

まねしてただいってるだけなんだ

そんなことないよつておかあさんという

あなたがおかあさんになつたらわかるよつておかあさんがいう

でもわたしはまだこいびともいないんだからね

それならおかあさんこいびとのつくりかたをおしえて

おとうさんみたいないなひとがいいな

おしえてくれたらすこしだけ

おかあさんのことすきになつてあげる

小さな傷をきみに

きみの魂に傷をつけたい

ほんの少しの傷でいい

誰も気がつかないくらいの

きみ自身だって気がつかないほどの

そのほんの少しだけ

もしそれができたら他には何にもいらないよ

きみの声も

きみの言葉も

きみの心も

何一つ欲しがりはしない

ぼくの声が届かなくても

ぼくの言葉が分からなくても

ぼくの心が伝わらなくても

そんなこともどうだっていい

きみの魂に傷を

ぼくのあらゆる力を込めて

誰にも気づかれないほどのほんの少し

ただ傷つけたぼくだけが知っている

世界のはじまり

生まれて来なければよかったと

言うことができたならどんなにか幸せだろう

生まれて来なかったわたしのことを

わたしは知らない

わたしじゃなければよかったと

言うことができたならどんなにか幸せだろう

わたしじゃないわたしのことを

わたしは知らない

あなたに出会えてよかったと

言うことができたならどんなにか幸せだろう

あなたに出会わなかったわたしのことを

わたしは知らない

わたしがわたしであつたことから

この世界は始まって

わたしがわたしであるままに

この世界は終わるのだろう

この世界の向こう側へ

行きたい気持ちを抱えて

この世界のこちら側に

わたしはあり続ける

今すぐ全てを

大人になったら分かるよって
子どものころに言われた言葉
何言ってるんだいと思ってたけれど
確かにそうだったことがある

生まれたときなにも知らなかった
ひとつまたひとつ身につけてきた
苦労して手に入れたはずのそれらが
このごろはともうつとうしい

それは不自由の象徴だから
精神は時にしばられて
時間をかけなければ分からないことなら
もうこれ以上欲しくない

今すぐ全てが分かるのでなければ
この世界のどこに自由があるというのか
今すぐ全てが分かるのでないこと
人はそれを歴史と呼ぶのだろう

奇跡の確率

夜空に散りばめられた星のように
数えきれないほどのひとびとのなか
わたしをただ一人だと言ったあなたは
わたしよりもなんと幼いことでしょう

それは数千億分の一の奇跡なんだ
そんなことを言っただけあなたにはしゃぐけれど
それが数千兆分の一の確率だとしても
数字にできるものなんかありがたくも何ともないよ

あなたはわたしの世界の根拠
あなたに出会ってわたしの世界は始まった
一切を生み出した源泉であって
一切が過ぎ去る空間でもある

わたしに出会っていなかったとしても
あなたは他の誰かに出会っていたかしら
そういう比較ができないってことを
あなたは早く分かってね

もう一歩分の力

踏み出した足が

それ以上進まない

もう一歩踏み出すぞ

決意だけ空回り

ここにいればこれまで通り

そんなことは分かつてる

ここは悪いとこじゃない

それだって百も承知だ

でもここにはいたくない

より良いものがほしいわけじゃなくて

ここから離れることそれ自体が

それだけでより良いことなんだ

今さっきぼくは一歩を踏み出した

大事なのはもう一歩

もう一歩踏み出すことができれば

その次の一歩は簡単だ

今何よりも

もう一歩踏み出す力が欲しい

その力さえあれば

ぼくは違ってたぼくになれる

チャラ

分かったと思い込んでいること
分かったフリをしていること
分からないことへの恐怖に
それを隠そうとする心もち

ひとつひとつを洗いたい
全てを脱ぎ捨ててしまいたい
あらゆることをチャラにして
まっさらな気持ちに戻りたい

これまでためてきたいくらかの
知識に思考に記憶に経験
ひとつひとつを放り投げ
全てを捨ててしまいたい

なにかであるまえのわたしに
なにものでもなかったわたしに
なにかになろうとする前の
わたしである前のその場所へ

幾つもの真実のなかで

真実は一いつきりじゃないけれど
きみが持てる真実はひとつだけ
そのひとつは生まれたときからずっと
きみと分かちがたく結びついている

きみはもつと自分を信じるべきだ
大切なものは全てきみのなかにある
きみはもつと自分を信じていいんだ
宇宙を信じる程度には

頼るものがなくなつて
きみはひとりで生きていける
今そこにそうしていること自体が
ひとりで生きられる証なんだ

今そこにいることから
全てを始めよう
何にも頼らずでもただ一つ
真実を所有していることだけを信じて

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6184/>

あまりのことばたち

2011年4月2日09時51分発行